第二講 演習問題(2)

次の文章は『発心集』の一話である。これを読んで、後の問いに答えよ。

美作守(みまさかのかみ)顕能(あきよし)のもとに、なまめきたる僧の、入り来たつて経をよにたふとく読むあり。主(あるじ)聞いて、「何わざし給ふ人ぞ」と云(い)ふ。近く寄つて云ふやう、「乞食(こつじき)に侍り。但し、家ごとに物乞ひありくわざをば仕(つか)うまつらず。西山なる寺に住み侍るが、いささか望み申すべき事ありてなむ」と云ふ。物ざま、むげに思ひ下すべき<u>ィ</u>にはあらざりければ、こまやかに尋ね問ふ。「申すに付けて、いと異様(ことやう)には侍れど、ある所のなま女房を相ひ語らひて、物すがせなんどし侍り［A］程に、はからざるほかに、<u>1ただならずなりて</u>、此(こ)の月にまかり当りて侍るを、『偏(ひとへ)に我があやまちなれば、<u>2殊更(ことさら)こもりゐて侍らむ程、彼が命つぐばかりの物あたへ侍らばや</u>』と思ひ給ふるが、いかにもいかにも、力及び侍らねば、もし、御あはれみや侍るとてなむ」と云ふ。事の起りは、げにと覚えずなれど、「<u>3さこそ思ふらめ</u>」といとほしく覚えて、「いとやすき事にこそ」とて、おしはからひて、人一人(いちにん)に持たせて、そへて取らせんとす。此の僧の云ふやう、「<u>4かたがたきはめてつつましく侍り</u>。殊更そことは知られじと思ひ給ふるなり。自ら持ちてまからん」とて、持たるるほど負うて出でぬ。

主、なほあやしく思ひて、左様(さやう)のかたに意得(こころえ)たる者一人を付けてやる。様をやつして、見かくれに行きける程に、北山の奥にはるばると分け入りて、人も通はぬ深谷に入り〔ロ〕にけり。一間ばかりなるあやしき柴の庵(いほり)の内に入りて、物うち並べて、「あな苦し。(注)三宝の助けなれば、(注)安居(あんご)の食(じき)もまうけたり」と独りうち云うて、足うち洗ひてしづまりぬ。此の使ひ、「いとめづらか〔ハ〕にもあるかな」と聞きけり。日暮れて、こよひ帰るべくもあらねば、木陰にやはら隠れゐ〔ニ〕にけり。夜ふくる程に、法華経を夜もすがら読み奉る声、いとたふとくて、泪(なみだ)もとどまらず。明くるやおそしと立ち帰りて、主に、ありつる様を聞こえければ、驚きながら、「さればよ、ただ者にはあらずと見［B］」とて、重ねて消息をやる。「思ひかけず、安居の御料と承る。しかあらば、一日(ひとひ)の物は少なくこそ侍らめ。此れを奉る。なほも入らむ事候はば、必ずのたまはせよ」と云はせたりければ、経うち読みて、何とも返事云はざりけり。とばかり待ちかねて、物をば庵の前に取り並べて帰りぬ。日来(ひごろ)経て、「さても、ありつる僧こそ不審なり［C］」とて、おとづれたりけれど、其(そ)の庵には人も無くて、前に得たりし物をば、外へ持ちい〔ホ〕にけるとおぼしくて、後の贈り物をば、さながら置きたりければ、鳥・けだもの食ひ散らしたるやうにて、ここかしこにこぼれ散りてぞあり［D］。

実(まこと)に道心ある人は、かく、我が身の徳を隠さむと、5過(とが)をあらはして、貴まれん事を恐るるなり。もし、人、世を遁(のが)れたれども、6いみじくそむけりと云はれん、貴く行ふよしを聞かれんと思へば、世俗の名聞(みやうもん)よりも甚し。此の故に、ある経に、「出世の名聞は、譬(たと)へば、血を以て血を洗ふが如し」と説けり。本の血は洗はれて、落ちもやすらん、知らず。今の血は、大きにけがす。愚かなるにあらずや。

（注）　三宝…仏法僧の三種の宝。
　　安居…夏の九十日間、特定の場所に籠もって行う仏道修行。

問一　二重傍線部イ～ホの「に」の中から完了の助動詞を二つ選べ。

問二 傍線部１「ただならずなりて」とは具体的にどのようなことか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ 女が身ごもったこと。
ロ 女が病気にかかったこと。
ハ 自分が官職を追われたこと。
ニ 自分が出家の身になったこと。
ホ 自分の修行の時期が近づいたこと。

問三 傍線部２「殊更（ことさら）こもりゐて侍らむ程、彼が命つぐばかりの物あたへ侍らばや」の意味として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ 彼が謹慎していた間も、せめて食事くらいは与えてやりたかった。
ロ 彼女がひきこもっている間くらい、私の食事の世話をしてもらいたい。
ハ 彼女が出産のために外出できない間だけでも、彼女に食事を与えたい。
ニ 私が世間を遁れていた間も、彼女の食事の心配だけはしてあげたかった。
ホ 私が修行のために庵に籠もった時には、どうか食事だけでも与えてほしい。

問四 傍線部３「さこそ思ふらめ」には、僧に対する主のどのような気持ちが込められているか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ 共感　　ロ 尊敬　　ハ 軽蔑　　ニ 称賛　　ホ 同情

問五　傍線部４「かたがたきはめてつつましく侍り」とあるが、僧がこのように言った真意はなにか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　女との生活を邪魔されたくなかったから。
ロ　厳しい修行を人に誉められたくなかったから。
ハ　ただの物乞いであると思われたくなかったから。
ニ　あまりに粗末な住家を見られたくなかったから。
ホ　生活の糧を得るための嘘を見破られたくなかったから。

問六　空欄［A］〜［D］には過去（回想）の助動詞「き」か「けり」が入る。空欄に入る語の組み合わせとして、最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　A　ける　B　き　C　しか　D　き
ロ　A　ける　B　けれ　C　ける　D　し
ハ　A　ける　B　けり　C　し　D　しか
ニ　A　し　B　き　C　けれ　D　ける
ホ　A　し　B　けれ　C　けれ　D　ける

問七　傍線部5「過（とが）をあらはして」とあるが、この僧の場合、具体的にはどのようなことか。最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　出家したにもかかわらず世の名声を望むこと。
ロ　嘘をついてまで人から物を得ようとすること。
ハ　人の好意をあえて踏みにじる行為をすること。
ニ　仏道修行の途中でも時おり世間に交わること。
ホ　僧の身で女性と関係を結んだなどと語ること。

問八　傍線部6「いみじくそむけり」とあるが、「そむく」とはどのような意味か。本文中から同じ意味の熟語（漢字二字）を抜き出して記せ。

問九　本文の内容に合うものを次のイ〜ホから一つ選べ。

イ　僧を立派な修行者だと見込んでいた主の期待は、みごとに裏切られた。
ロ　主は僧のとった行動を通して、本当の道心とは何かを初めて理解した。
ハ　僧の修行は、結局は貧しい生活から逃れるための口実でしかなかった。
ニ　僧は自らを極限に追い込むために、敢えて主からの施しを無駄にした。
ホ　真の出家者を志した僧は、自分が愚か者だと思われるように振舞った。

第二講　演習問題(2)

〈模範解答〉

問一　ロ・ニ　**問二**　イ　**問三**　ハ　**問四**　ホ　**問五**　ロ
問六　ニ　**問七**　ホ　**問八**　出世　**問九**　ホ

〈現代語訳〉

美作守顕能のもとに、年若い僧で、入って来て経を実に尊く読む僧がいる。主人が聞いて、「何事をしなさる人か」と言う。（僧が）近く寄って言うことには、「乞食（＝托鉢）でございます。ただし、家ごとに物を求めてあちこち行くことをいたしません。西山にある寺に住んでいますが、少しお願い申し上げたいことがあって（こちらに参りました）」と言う。様子は、むやみと軽蔑することはできなかったので、（顕能は）丁寧に事情を問う。（僧は）「申し上げるにつけて、たいそうおかしなことではございますが、ある所の若い女房と深い仲になって、洗い物をさせなどしましたうちに、思ってもいないことに、（女が）身ごもって、（出産が）今月に当たっておりますが、『ひたすら自分のあやまちなので、（出産のために）特別に籠もっていますような間、彼女が命をつなぐくらいの食べ物を与えたいのです』と思いますが、どうにもこうにも、力が及びませんので、もしかしたら、哀れんでくださるでしょうかと思いまして（参りました）」と言う。事の起こりは、なるほどと思われないけれども、「そのように思っているだろう」と気の毒に思われて、「とてもたやすいことだ」と言って、一心に考えて、人一人に持たせて、添えて与えようとする。この僧が言うことには、「色々とひどく気が引けます。特に（自分の住まいが）そことは知られまいと思うのです。自分で持って行きましょう」と言って、持てるだけ背負って出た。

主人は、やはり変に思って、そのような方面についてわかっている者一人をつけてやる。（使いが）姿を目立たないようにして、見え隠れしながら行った時に、北山の奥にはるばると分け入って、人も来ない深い谷に入った。一間くらいである粗末な柴の庵の中に入って、物を並べて、「ああ苦しい。三種の宝の助けなので、安居の（間に必要な）食物も準備した」と独り言を言って、

足を洗って静かになった。この使いは、「まったくめったにないことでもあるなあ」と聞いた。日が暮れて、今晩帰ることもできないので、木陰にそっと隠れていた。夜が更ける頃に、法華経を一晩中読み申し上げる声が、とても尊くて、涙も止まらない。夜が明けるやいなや戻って、主人に、先ほどの様子を申し上げたところ、（主人は）驚きながら、「やっぱりな、ただ者ではないと思った」と言って、重ねて手紙をやる。「思ってもいないことに、安居のための物とお聞きします。そうであるならば、先日の物は少ないでしょう。これを差し上げます。さらに必要なことがありましたら、必ずおっしゃってください」と言わせたところ、（僧は）経を読んで、何とも返事をしなかった。（使いは）しばらく待ちかねて、物を庵の前に並べて帰った。

数日間経って、「それにしても、あの時の僧は不思議だなあ」と思って、訪ねたけれど、その庵には人もいなくて、前に手に入れた物を、外へ持って行ったと思われて、後の贈り物を、そのまま置いてあったので、鳥や獣が食い散らしたようで、ここあそこにこぼれ散っていた。

本当に仏道心がある人は、このように、自分の身の徳を隠そうと、非難すべき点をあらわして、尊ばれるようなことを恐れるのである。もしも、人が、出家したけれども、見事に出家したと言われるよう、尊く修行するということを聞かれようと思うと、世俗の評判（を求めること）よりもひどいことだ。このために、ある経に、「出家して名誉を求めることは、たとえば、血で血を洗うようなものだ」と説いている。もとの血は洗われて、落ちることもたやすいだろうか、知らない。新しい血は、大いに汚す。おろかなことではないか。